

## 中国文学の研究——鈴木修次博士を偲ぶ——

横山伊勢雄

一  
り、先生のご業績を回顧して師を偲ぶすがともなればと、敢えて筆を執る次第である。

### 二

われらが学会の支柱であった鈴木修次先生が長逝された。大会で適確な発言により若手を導いてくださった温顔に再び接することはない。まして健筆によって陸統と発表されたご著書がここで途絶えてしまったことは、先生にもこれから期するところがおありと思われていただけに、斯界にとって痛恨の極みと言うしかない。

それにしても鈴木先生のこれまでのお仕事は、既にして質量ともに歴大であり、まことに長逝の直前まで、新しい分野に知的関心を燃やされて著述を続けられたお姿は、懐愴でさえある。

そうした鈴木先生のお仕事に対して、怠惰な私など何も言う資格はないのであるが、編集委員からの強い要望もあ

鈴木修次博士のご生涯の歩みとそのご業績については、大阪教育大学『学大國文』第三二号鈴木修次教授退官記念論文集（一九八九年）に附載する略年譜と著述目録に詳しい。この校正書き込みが先生の絶筆となってしまったものである。

これによるに、ご著書二六冊、編著四冊、論文・諸雑誌掲載文は実に四一六篇を数えることができる。中国古典文学の研究を核としながらもいかに先生の知的関心が広範なものであったか、目録を一覧すれば今更のように痛感されよう。

その広範なお仕事を無理にまとめれば、A 中国古典詩に  
関するもの、B 漢語と日本語に関するもの、C 思想家に関  
するもの、D 中国と日本の比較文学に関するものなどに分  
類できよう。いかにも大塚の漢文学の伝統に立つ目配りの  
広さを示している。

A 群については、東京教育大学文学部に在職中の研究成  
果がある。鈴木先生は詩経の研究から出発され、それはの  
ちに『中国古代文学論―詩経の文芸性―』（昭和五二年）  
としてまとめられる。しかし先生が最初に精力を傾注され  
たのは、博士論文となった『漢魏詩の研究』（昭和四二年）  
であった。ついで先生は唐詩の研究に進まれ、『唐代詩人  
論』上下（昭和四八年）を著わされた。この書はのちに講  
談社の学術文庫に四分冊で収録（昭和五四年）され、先生  
の代表的著述となっている。

昭和五一年四月に先生は広島大学総合科学部教授として  
転任された。それ以後、総合科学の立場から中国文学を検  
証するように変化された。それは同年七月末日の脱稿にな  
る「詩と伝達―中国詩の場合―」に「今までは文学部に所  
属していて、中国文学の現象を説いていればよかったので  
あったが、今回、総合科学部という、新しい考え方に立つ  
学部籍を置くようになったのにもない、総合科学とい

う観点から中国詩学の意義を考えてみることの必要を感じ  
た。このレポートは、そうした観点に立つてとりあえず現  
時点までのわたくしの考え方を整理してみたものである」  
とご自身で付記されていることからみても明白である。こ  
の「伝達」をキーワードとして唐詩を見た成果が『唐詩―  
その伝達の場合』（昭和五一年一〇月）といえよう。以後の  
先生は文明論から中国文学を見て発言されることが多い。

B・D 群は広島大学でのお仕事である。B 群のお仕事は  
『最新漢和辞典』（昭和五〇年）などにおける漢字・漢語の  
吟味から出発されたものである。『漢字―その特質と漢  
字文明の将来―』（昭和五三年）、『漢語と日本人』（同上）、  
『日本漢語と中国―漢字文化圏の近代化―』（昭和五六年）、  
『漢字再発見』（昭和五八年）などのご著書は国語学界の注  
目を集め、昭和五九年三月から三期にわたり国語審議会委  
員（文化庁）をつとめられることとなった。D 群には『中  
国文学と日本文学』（昭和五二年）など、C 群には『莊子  
―人と思想』（昭和四八年）、『論語と孔子』（昭和五九年）、  
『孟子―民を貴しと為す―』（同上）などがある。C 群のは  
漢学者としての著述ということになる。しかしその中の  
『文学としての論語』（昭和五四年）は口承文学として伝達  
のための修辭学から論語を再考しようとする学際的な新し

い研究の成果と見るべきである。

なお鈴木先生の最初のご著書は『元好問』（漢詩大系第二〇、昭和四〇年）であった。先生にとって唯一の注釈書であり、宋以後の文学を対象とされたのも唯一のことである。急な代打で意に満たない点がおありになったのか、あるいは長く「杜甫の会」を主宰されて注釈の困難さを意識され、避けておられたのか、今や問うこともできないが、残念な点である。漢魏詩の注釈を残してくださったらとの思いが強いのは私だけではなからう。宋代以後の研究は君達にまかせたと言われて、発言を先生はことさらひかえておられた。その期待に応えることのできないわれわれには先生のことを想うたびに内心忸怩たる思いがある。

### 三

上述の概観のように鈴木先生のお仕事は広範であり、学恩を受けることも広いが、ここでは中国文学の研究に限定して、われわれが継承すべき点を考えてみたい。ただ鈴木先生はご研究の対象を唐代までの詩に限定されていて、詞・小説・戯曲など文学の他のジャンルについては研究を發表されなかった。広島大での総合科学的研究は当然中国文学のトータルな把握に進むものと思われたが、そのお暇が

なかったのであろう。これも残念な点の一つである。

さて鈴木先生の『漢魏詩の研究』であるが、これは漢初から漢末の建安時代までにわたる古歌・古詩を中心とした文学現象を克明に追求した労作である。

同書は、第一章楚歌・新声考、第二章樂府・古歌・古詩考、第三章建安詩考の三章から成る。序によれば「詩経・楚辞の文学の伝統が、やがてどのようにふくらみ、変容してゆくのか、それを追及しようとするのが、わたくしの漢魏詩研究の出発点であった」とされ、当時は「文学の伝達は、耳と口とに主として依存したはずである」と、すでに「伝達」をキーワードにしておられる。

それは具体的作業として『古詩紀』などに収める作品について、その出所を史書や類書にたんねんに当たることによって明かにしていくことになる。つまり作品の伝達された原形乃至は背景を探り出すことであって、単なるテキストクリティクとは異なる労苦を伴う作業である。

その結果、『樂府詩集』『古詩紀』『全漢三國詩』などに収める古歌古樂府と『太平御覽』や李善注引との異同検討の上に、従来の総集に未収載の漢魏の民間詩歌遺句二一例を新に発掘するという成果を挙げられた。

先生はそれを「以上の八十有余例にわたって求められた

漢魏の民間歌曲辭遺句は、あるものは建安の詩に先行し、あるものは建安の詩と併行して世に行われたものと考えられるものであって、その時代性についての確なことはいえぬまでもおおむねは三世紀の始めごろ、すなわち後漢も末に近い時期における民間の歌であったと考えられる」と慎重に推定されている。その上で、「やはり同じころの民間詩であったと考えられる古詩」についても古歌と同様の作業のもとに「古詩遺句」六例を「古詩の逸をたしかに補うもの」として発掘された。貴重なお仕事である。

こうした文献博搜の成果が先生の研究における検証の依拠とし仮説を補強しているといえよう。たとえば第二章第四項四伝蘇武・李陵詩考において、「蘇武、李陵の名のもとに伝えられている離別をテーマとするこれらの詩群も、離別の情緒をテーマとするオムニバスの作品として」「おそらく作者は不特定にして複数になるであろう」「それらが作られた時代ということになると、それはおたがいに、ほぼ同時期にあるのではないか。そしてそれは、古詩、古歌が口ずさまれていた時代と時を共にするものであろう」と、また、建安の詩人の活躍時代とも並行するであろう」と極めて慎重な言いまわしの結論が、古詩・遺句との比較検討の結果として説得力を持ちうるのである。

第三章は、建安詩について、漢詩の一応の終着とし、建安の詩人たちが、どういう作品から強い影響をうけ、どのような文学感情の燃焼を主としてはかったものであったかを明かにしようとされたものである。それは集団的とらえかたと詩人各個におけるとらえかたの両面からなされた。その基礎に文献博搜による逸詩の発掘がある点は前二章と同じである。

集団的とらえかたというのは、詩が社交的な場で作られ、贈答されるという現象に着目して、詩の題材が共通的であるから、詩題ないしは主題をとりきめ、習作的に作品が作られたとするとらえかたのことである。

これは詩人各個をとらえる場合にも反映されていて「曹丕論」において彼の詩が、遊戯的に感傷をもてあそぶ集団の作風の影響下にあり、「歌曲的羈絆からぬけ出ていない詩」であると結論されている。「曹植論」においても見方は同様である。先生が「曹植の詩を論ずるにあたり、その作品の全体にわたり委細をつくして論述することは、限られた紙幅ではできないので、詩の主題に即して主要な作品をとりあげ、考察を加えることにする」と断っておられるように、詩人各論に物足りなさを感じさせるのは、やむをえないことであろう。本書は漢代の歌謡文学の系譜をた

んねんに調査し、古歌と古詩の特色を吟味されたもので、その終着として建安詩をとらえられており、別に魏晉詩について書かれたなら、建安詩はその出発点としてとらえられたであろう。残念ながら鈴木先生は魏晉南北朝詩をとらえた書を公刊されず、唐詩の研究に進まれた。ちなみにわが学会の会員諸氏が六朝詩についてつぎつぎに秀れた研究を発表し、その空白を填めてくれていたのは心強い限りである。あるいは先生にはこのことを予期されて余白を残されていたのであろうか。

#### 四

つぎに鈴木先生の『唐代詩人論』について見てみよう。この書は『漢魏詩の研究』が極めてオーソドックスな研究方法の成果であったのに対して、唐詩人を対象にしての文芸批評である点に特色を見出すことができる。ただし本書も唐代の詩の変容を追求しようとするもので姿勢は一貫しておられる。

本書の成立事情については先生ご自身が「あとがき」に書いておられるが、それによると東京教育大学での中国文学史の講義を昭和三七年から四三年まで唐代文学論に限定して継続し、それに手を加えて成稿にすることを一方でく

りかえし続けてこられたという。公刊が昭和四八年であるから、その成立に一〇年をかけたことになる。

先生は「外国文学研究者が陥りやすい通弊である一家専門」に陥ることをきらわれ、「文学史を扱う者としては、いきおいろいろいな詩人に対して、多角度の観察を加えてゆかなければならない」との姿勢をとられた。

さらに本書において先生が注意をはらわれたのは、「各詩人は、中国の過去の詩、すなわち六朝詩をどのように継承し発展させてゆくのか」という問題と、「詩人相互間の交遊に焦点を置いて論ずること」「詩人たちは、相互の交遊をおして、それぞれにどういう面において自己を主張し、どういう面において啓発しあったものであろうか」という問題とである。つまり詩人の人生と詩風が他者のそれとかかり合いながら形成されていくとする見方である。たとえば孟浩然・王昌齡・王維・李白と各詩人論が展開されているが、それらは交遊と詩風の影響の点でつながり交響し合って李白論へと昂揚していくのである。このうねりの次のピークは、高適論・岑参論を経て杜甫論において形成される。以下の詩人論は杜甫の影響下においてとらえられて、いくつかのうねりを示す。

いま少し詳しく「孟浩然論」を見ると、「孟浩然の生涯」

の見出しで、その生涯が時代と他の詩人とのかわりにおいて述べられる。孟浩然が三〇過ぎに、にわか仕官に奔走して失敗したことを玄宗の開元の治に参加せんとする詩人の気概に因るとするのは卓見であろう。「盛唐詩壇の先蹤としての孟浩然の立場をたしかめる」意図からする考察の鋭さを示している。

「孟浩然の詩風と、その影響」の項では、孟浩然と陶淵明の関係を述べたあとに、「謝靈運の詩的感覚と、孟浩然のそれが、同質な傾向を持つがゆえに、孟浩然是謝靈運の詩に惹かれ、学ぶところがあつたのである」と例証を挙げて指摘されている。

また孟浩然が包むようなやわらかい光線を好み、その嗜好がそのまま王維に継承されるとするのもおそらく先生の新知見であろう。孟浩然是「山水景物のとらえ方において、感覚的ひらめきを、印象派の画家ふうにとらえ」、その傾向を継承した王昌齡は「鋭い感受性をもって把握した景物描写等に、人事への比喻を含蓄させようとし」、王維はさらに「観念的詩境を深め、象徴詩の可能性を追究するにいたつた」と、文学史的展開をそこに見るのも、一家専門の弊に陥らない先生ならではの追求であろう。

李白は孟浩然の影響を受けながら、詩を動的世界を写す

ものに転換させ、あとに続く高適・杜甫・岑参・元結らに強い影響を与えたとする見解もやはり文学史家のものである。

また鈴木先生には「そもそも唐詩は、社会的にいかなる性格を持った文芸であつたのか」という問題意識があつた。冒頭の「初唐における歌行体の詩の文芸性」と岑参論の中の「岑参の歌行詩」の二篇は、その答案として伝達のための修辭的工夫を検証したものである。先生の方法論の特色を示す論文といえよう。

本書の中心となる「李白論」と「杜甫論」については触れるべきことが多く、また「李賀論」における杜甫の影響の指摘など卓見も多いが、紙幅の関係でいまは措く。

「柳宗元論」一篇は、もと大学の紀要（昭和四六年）に発表されたもので、その合理意識、他の文学者との関係、政治改革、その文学活動（古文と詩）と多角的に柳宗元を詳論しているが、一家専門の研究者から見れば、柳宗元の学問の内容など、なお論ずべき点は多いであろう。

私見を加えれば、柳宗元が「悲哀を超克して、次のよく知られた孤絶の詩をまでよむに至つた」として、「江雪」と「漁翁」の二首を引用したあとに「柳宗元は、仏教にも関心が深く、僧とのつきあひも多かつたので、いきおい詩

に禅味が加わる」の一行を書き、以下は諷諭詩に話題を転じておられるが、私にはこの文脈からは超克と孤絶と禅味の結合が納得できない。筆がつい走ったのではなからうか。検証を伴わない部分に言い過ぎと思われる文章が散見されるのは惜しまれる点である。

なお「あとがき」によれば、先生には「盧照鄰論」から「晩唐の僧と詩」までの一五項目を挙げて「その発表を今後に期したい」との希望を持たれていた。その実現を見なかったことは残念なことである。

## 五

最後に、鈴木先生の「中国文学史上の諸問題」に触れておきたい。先生が広島大学教授を定年退官されるのを記念して、東京教育大学における受業生たちで『中国の文学論』（昭和六二年）をまとめた。その際、先生にお願いして書き下していただいたのが右の文章である。ここには先生の中国文学に対する考え方とこれまでのお仕事上の位置づけが示されているので、ぜひ一読されるようお勧めしたいが、ここにその一端を紹介しておこう。

先生は、中国の文学が古い歴史を持つのは「同一表記による記録」（表意文字としての漢字の雅語による表現）を

持続させたことによるとされる。それは記録を後世に残すことに異常に強い意識を持ち続けた中国の知識人たちが、伝達文明のくふうをし、それによって古代から現代までのたくさん作品を、すべての時代にわかって残し続けたもので、他の諸民族において類のない現象とされるのである。

先生はそのご研究の始めから「伝達文明と文学の関係」に一貫して関心を持ち続けてこられた。それは「文学は、伝達という手段を通して始めて作品が文学となり、文学としての価値と効用とを生み出すものである。享受者がなければ、文学は存在しない。そしてその享受者は、伝達文明の変化に応じて確実に増大してゆく。それゆえ文学史の変化は、伝達文明の変化と併行して発展してゆくものである」という基本認識によっているのである。なお歌曲歌辞・朗誦・木版印刷・活字印刷を伝達の手段と見ておられるが、書写あるいは写本を加える必要があるかもしれない。

先生は広島大学に移籍されてから、文学の比較研究の必要性を考えられ、「中国文学の特性を理解するためには、他民族の文学現象との比較論を考えるということが必要であるとともに、それによって中国文学の特質がクローズ・アップしてくるといふ長所が生まれてくる」として、日本

文学との比較にも着手されたことを述べて、この論文は結ばれている。

## 六

以上、鈴木修次先生の残されたお仕事について、そのおもなものの特徴を概観してきた。先生のお仕事の中心はあくまで中国詩学であるが、長い大学生活での研究と教育が先生のように一体化している例は稀であろう。受業生にとつての幸せであった。

また先生の諸論文を拝見すると、いろいろ新しい手法を取り入れて、古典詩を多角的に考察しようとなされていたことがわかる。それがわれわれの陥りがちな新しがりや奇をてらうものではなくて、大きい見通しの中に生かされているのである。先生は中国の文学がいくつかのサイクルを持つて展開していると見られ、一サイクルごとにその文学の現象を客観的に把握されていったのである。それを照射するものとして伝達文明を取り入れられた。

鈴木先生は、重箱の隅をほじくるような研究は忌まれ、反対にまた新中国の政治的基準と芸術的基準で古典文学を評価する硬直さも忌まれた。文学それ自体の史的展開とその時代の社会における効用をできるだけ作品そのものに語

らせようとされたのである。

学問においては、よく今日的視点ということを言うが、今日ほど社会が巨大化、複雑化し、価値観が多様化して、いわゆるブランド・セオリーが弱体化し、さまざまなミニ・パラダイムが盛衰をくりかえしている時代はない。文学研究もその埒外には在りえないのであるが、あまり時流に流されてはなるまい。

中国文学の研究においても、その方法論には、不易と流行の二面がある。不易を考える場合に、鈴木修次先生のご業績そのものが、われわれ後進にとって手本となり、答えを与えてくださるであろう。この際、各自が己の中国文学研究の在り方を再検討し、それぞれに研究の一步を大きく進めることができれば、鈴木先生の御霊も安らかになられるのではなからうか。

一九九〇年四月記

(新潟大学)